The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	生きづらさのオートエスノグラフィー : 性別違和を伴う勤労中高年ASD（自閉症スペクトラム障害）者
Author(s)	林, 桂生
Citation	大阪大学言語文化学. 2019, 28, p. 15-27
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72855
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

生きづらさのオートエスノグラフィー

―性別違和を伴う勤労中高年 ASD（自閉症スペクトラム障害）者―*

林　桂生**

キーワード：LGBT、ASD、オートエスノグラフィー

It was in an article published in the July 2018 issue of the conservative magazine *Shincho 45* that Mio Sugita, a member of the ruling Liberal Democratic Party（LDP）, described LGBT（lesbian, gay, bisexual and transgender）people as “unproductive.” The sensational statement has caused predictable controversy and drawn a lot of attention from various fields. However, this statement is not the only problem the article reveals, but there are much worse and much more problematic descriptions found here in the article, based on misunderstandings and ignorance. Sugita wrote;“Are LGBT people really discriminated against so much? Even if one of my friends is gay or lesbian, I don’t mind it at all. It is how the person is capable or not that matters. I think the same is true of most people,” “I hear their hardship of living is due not so much to social discrimination they suffer from, but to the lack of understanding of their parents,” “There are men and women in the world. That’s enough, isn’t it?”

I am 53 years old now. I was diagnosed with Gender Identity Disorder at the age of 38. I was also diagnosed with Pervasive Developmental Disorder（now called Autism Spectrum Disorder）at the age of 46. In this paper, I refer to the relationships between LGBT and ASD and, by detecting Orientalist stereotypes in the minds of non-LGBT or non-autistic people, try to confirm those discriminations found in Sugita’s article resulting from ignorance, indifference and incomprehension of the majority. To analyze those discriminatory discourses, I employ an autoethnographic method, or a kind of self-narrative approach which emphasizes the social context of discourses. The remarks of the LGBT participant, who attended the meeting of Handai（Osaka University）ASD and Transgender Café held on September 1, 2018, are quoted as a strong evidence.

---

* An Autoethnography on Hardship of Living : Middle-Aged ASD Workers with Gender Dysphoria（HAYASHI Keisei）

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程修了

1 はじめに

> オリエントと東洋人（オリエンタル）とは、―その語のもっとも深い意味において―発展・変化・人間的運動の可能性それ自体を否定されているのである。知悉され、究極的に固定化され、非生産的であるような特質をもったオリエントと東洋人（オリエンタル）とは、やがて好ましからざる不変性と同一視されるようになる。（サイード 1993b:25）

「LGBT[1] のカップルのために税金を使うことに賛同が得られるものでしょうか。彼ら彼女らは子供を作らない、つまり『生産性』がないのです」―この一節のために、雑誌『新潮 45』に掲載された衆議院議員杉田水脈による寄稿文「『LGBT』支援の度が過ぎる」が批判を浴びたのは 2018 年 7 月のことである。人を人と扱わない「生産性」という語のみが注目されたが、問題はそこだけではない。

「LGBT だからといって、実際そんなに差別されているものでしょうか」と差別の存在すら否定する非当事者の視点、「そもそも世の中は生きづらく、理不尽なものです。それを自分の力で乗り越える力をつけさせることが教育の目的」と助けを求める声をも封殺しかねない教育観、「女子校では、同級生や先輩といった女性が疑似恋愛の対象になります。ただ、それは一過性のもので、成長するにつれ、みんな男性と恋愛して、普通に結婚していきました」という「普通」の当然視、「マスメディアが（…）報道することが（…）普通に恋愛して結婚できる人まで、『これ（同性愛）でいいんだ』と、不幸な人を増やすことにつながりかねません」と性的少数者を自在に増やせるものであり「不幸な人」であるとする誤謬、その他不適切な記述が多々ある杉田の文章の「生産性」以外の部分がなぜ公でほとんど論じられないのか。これで少数派といかに共生することができるのだろうか。

本稿筆者は LGBT の T であるトランスジェンダーの X ジェンダーであり、30 代で GID（性同一性障害）[2]、40 代で広汎性発達障害の診断を受け、このような無知・無理解から生じる同じ発想の矛先が、たとえば「発達障害」という比較的新しく台頭してきたかに見える困難を抱える者にいつ向けられるかわからないと危惧する中高年 ASD[3] 者でもある。

---

[1] Lesbian、Gay、Bisexual、Transgender のそれぞれの頭文字をまとめたもので、性指向（L、G、B）と性自認（T）に関する性的少数者の総称。（針間 2016:8,11）

[2] Gender Identity Disorder（性同一性障害）は、2013 年 5 月に公表された DSM-5（アメリカ精神医学会「精神疾患の分類と診断の手引」第 5 版）において Gender Dysphoria（性別違和）に変更となった。また、現在トランスジェンダーと性同一性障害は異なるものとされている。

[3] DSM-5 による ASD（Autism Spectrum Disorder）の分類は、従来の広汎性発達障害のうちアスペルガー症候群・高機能自閉症・特定不能の広汎性発達障害をほぼ含む。引用文献が「発達障害」や旧診断名となる「アスペルガー症候群」等を取り上げている場合は引用文献の表記に従う。「ASD」、「発達障害」と対比した場合のいわゆる健常（者）を「定型発達（者）」と呼ぶ。

本稿は、社会における少数派に属する筆者によるオートエスノグラフィーの試みであるが、Reed-Danahay の定義ではオートエスノグラフィーの書き手は二つの文化の境界を行き来し（a boundary-crosser）、二重のアイデンティティ（a dual identitiy）を持つ（Reed-Danahay 1997:3）。そこで提起される問題にはカルチュラル・スタディーズから発展してきた表象の問題も含まれるが（前掲 :3）、それ自体は「セルフナラティヴという行為及び様々な政治的コンテクストにおいてその行為に伴う創造と制限との間の緊張」を示す「社会的コンテクスト内に自己を置くセルフナラティヴの一形式」である（前掲 :9）。本稿は LGBT に対する言説にオリエンタリズム的思考を読み取り、カルチュラル・スタディーズの本来の理念を参考に、生きづらさを抱える LGBT や ASD という少数派の現状の考察と改善への提言を行うことを目的とする。

2 ASD と性自認

2. 1 X ジェンダーとは

まず、性同一性障害の特性は、「自らの性を嫌悪あるいは忌避する」、「反対の性としての性役割を求める」（山内 1999:32-33）など、自分は生まれついた性とは「反対」の性別であるという確信を持つことであり、性別二元論に立脚する。トランスジェンダーも「割り当てられた性別とは異なる性別に帰属する者」（佐々木 2017:5）であるが、必ずしも完全な性別適合手術までは望まない場合もある。そのうち X ジェンダーは、「心と体の性別が一致せず、かつ、男女どちらかの片方のみに属した性自認を持たない人」（Label X 2016:17）であり、この語が初めて一般の出版物で用いられたのは、吉永みち子（2000）の著書『性同一性障害―性転換の朝（あした）』であろうと言われている（前掲 :60）。

だが、1998 年に埼玉医科大学で我が国初の公の性別適合手術が行われ、さらに元競艇選手の性同一性障害の公表が話題になった 2002 年の時点でも X ジェンダーという言葉は知られておらず、「当時の X ジェンダーの多くは自分を『性同一性障害』であり、かつ狭義のトランスジェンダー（TG）であろうと考えて」おり、「自分で『どちらかの性に当てはめなければならない』という強迫観念などから（…）いったんは生まれとは反対の男女いずれかの性別で社会生活を営もうと決意した」当事者もいるような状況であった（前掲 :77,79）。本稿筆者もその一人である。

2. 2 ASD と性別違和の併存

杉山（1999）の『高機能広汎性発達障害―アスペルガー症候群と高機能自閉症―』には、鬱病など高機能広汎性発達障害の「合併症の問題」のうち「その他の障害」として以下のような記述がある。

（…）まれに性同一性障害、フェティシズムなどがみられる。性同一性障害は彼らの自己イメージを結ぶ能力のつたなさから、自己の性的イメージの混乱が生じるのかもしれない。あるいは、不適応の原因を自己の性的属性に求めて、反対の性に同一化することで不適応を解決しようとする独特のファンタジーなのかもしれない。（杉山他 1999:43）

性別違和の問題は、同じ杉山（2007）の『発達障害の子どもたち』でも、「青年期にさしかかったときに、（…）彼らは、自己がどこか周りとは違うと気づくようになる。しかし他者の目をもたないがために、どこが問題なのか分からない。性同一性障害へと発展することもまれではなく、男の子が女になりたい、逆に女の子が男になりたいと言う」と触れられているに過ぎない（杉山 2007:113）。

一過性のファンタジーとしての性別違和も青少年期ならあり得るのだろうが、決してそのようなケースだけではない。だが、成人でも就労支援が問題となる若者や親亡き後の心配をせねばならない知的障害のある者等はともかく、社会に出ている中高年 ASD 者に対する調査自体が少なく[4]、その中で GID の確定診断まで受けた ASD 者、診断はなくても数十年来性別違和を抱える ASD 者についての国内での本格的な研究は勿論、臨床例を紹介した文献さえほとんど存在しない[5]。

2016 年 2 月発行の LGBT 特集の『精神療法』（金剛出版）では、大学の学生相談の場におけるある学生への観察として、「異性には興味を持てないから同性愛…非常に短絡的で図式的な理解の仕方以上に、筆者は諸々の性格的特徴から、むしろ彼女に ASD 的な側面を見ていた」（高石 2016:31）、また何人かの学生について「セクシュアル・マイノリティを高唱する学生たちの生育史や日々の困難さに耳を傾けていると、『それはひょっとすると、発達障害的な特性に基づくものではないか……』という思いが脳裏を過ることがある」（前掲 :32-33）という記述が見られるが、前者に付された注釈は「ASD もしくは ADHD といった発達障害とセクシュアル・マイノリティとの関連は、その発生論的な問題とも絡んで、恐らく相当慎重に議論されるべき話題」（前掲 :31）であるとするにとどまる。この時点でも「未だ十分な検討はされていない」、「今後の検討が待たれるところ」（前掲 :31）という状態ではあるが、上記の p.31 の本文の直後には「こう

[4] 2018 年 9 月 12 日現在、CiNii（https://ci.nii.ac.jp/）の論文検索で検索語「発達障害」でヒットするものは 15737 件、「ASD」で 2851 件だが、「成人　発達障害」では 508 件、「大人　発達障害」で 216 件、「成人　ASD」で 185 件、「大人　ASD」では 24 件、「中高年　発達障害」では中高齢知的障害者についての論文 1 本、「中高年　ASD」では本稿筆者の論文 1 本のみである。

[5] 注釈 4 と同日、CiNii の論文検索で「発達障害　性同一性障害」では 11 件、「ASD　性同一性障害」が 2 件、「発達障害　LGBT」で 5 件、「ASD　LGBT」0 件である。また、「トランスジェンダー」の検索結果は 181 件だが、「発達障害　トランスジェンダー」も「ASD　トランスジェンダー」も 0 件、「X ジェンダー」自体が検索でヒットするのは 2013 年の論文 1 本のみである。

したいかにも危なっかしいクエスチョニングの時期を経て、やがて彼女は同性愛者としてのアイデンティティを模索し始める」という描写が続いており、少なくともこの「ASD的な側面」のある女子学生にとってLGBTであることは一過性のものではなかったと言える。

テンプル・グランディン、ドナ・ウィリアムズに続く3人目の高機能自閉症者として自伝を発表したグニラ・ガーランドの著書『自閉症者が語る人間関係と性』（2007）は北欧諸国と英米のASD当事者へのインタビュー集だが、ASD者にも「一般の人たちと同じように、さまざまな性的特性をもつ人がいる」（ガーランド 2007:122）ときわめて明快に述べられ、「『自分は本当は男の子だ』というのを周りは『固執』の一つの表現と見なしていたのだが、実は正真正銘のトランスセクシュアルであることが時を経てわかった」（前掲:128）ASDの少女などの例が挙げられている。

> 性別不特定で悩んでいる人たちもいる。しかし私が関わった人たちは、自分たちは男でも女でもなく、まぎれもなく「独自の性」であると確信していると語った。これらの中には、特定の性別を強制されるのをあえて拒み、他の人たちから「彼女」とも「彼」とも呼ばれたくない、という人たちもいる。（前掲:129-130）

「独自の性」、「『彼女』とも『彼』とも呼ばれたくない、という人たち」が、現在我が国で言うところのXジェンダーにあたる。

2.3 LGBTのASD者とLGBTの定型発達者との齟齬

ASD者に性的少数者がいるならば当然次のような問題が起こる。ガーランドがインタビューしたアスペルガー症候群のゲイの男性は、「ゲイたちの中に入って行き、彼らと友だちになるのは、簡単ではない。ゲイが集まるスポットに来る大方の男たちは、僕と親しくしたいなんて思わない」（前掲:124）と言う。「アスペルガー症候群でホモセクシュアルの女性も同意見で、レズビアンの人たちの中に入り込むのはむずかしくて、最後にはあきらめた」（前掲:124）との記述もある。

動作性IQが高く聴覚優位で、言われたことは即座にこなせるASD者はともかく、特に本稿筆者のように視覚優位で人の言葉は聞き取りにくく、空気を読んでその場の話題の流れに適した応答を瞬時に発することにも困難があるASD者には、通常の職場等の日常生活においても様々なコミュニケーション上の行き違いがある。同じ性的少数者同士といっても大部分は定型発達者であり、一般社会でコミュニケーション上の齟齬により定型発達者から疎外され離転職を繰り返すなど生活に支障が出ているようなASD

当事者が、LGBTの当事者会などでも上手く対応できず奇異な目で見られるであろうことは想像に難くない。

特にLGBTのうち性的指向の少数者であるLGBを合わせた数よりも性自認の少数者のTの方が少なく[6]、その中でもXジェンダーはさらに少数派である。そのXジェンダーのごく一部のASDである本稿筆者にとって、次章の杉田のLGBTに対する無知・無理解は定型発達者によるASDに対する無理解と同じ程度に脅威であることは特筆しておきたい。無論、XジェンダーのASD者である本稿筆者もそれ以外の問題に関して多数派に属する場合は同じ過ちに陥る可能性があることは承知の上である。

3 杉田水脈「『LGBT』支援の度が過ぎる」を読む

本稿筆者が主宰する「阪大自閉症スペクトラム（ASD）カフェ／阪大自閉症サイエンスカフェ」は、『新潮45』8月号の発売を受けて2018年9月1日に「阪大ASD・Xジェンダーカフェ　杉田水脈『「LGBT」支援の度が過ぎる』を読む」を急遽開催した。参加者はLGBTのASD者2名を含むASD当事者や支援職、大阪大学の教員と筆者を合わせて11名であった。同誌の杉田の寄稿文に形式段落ごとに（1）から（21）まで番号をつけたものを講読文献として配布した。以下、杉田の文章の一部とその部分に関する考察及び参加者の発言を続けて記載する。

> （4）しかし、LGBTだからといって、実際そんなに差別されているものでしょうか。もし自分の男友達がゲイだったり、女友達がレズビアンだったりしても、私自身は気にせず付き合えます。職場でも仕事さえできれば問題ありません。多くの人にとっても同じではないでしょうか。

LGBTではない非当事者の体験を安易に普遍化すべきではなく、「仕事さえできれば」という評価の仕方は定型発達者の奢りとも取れる。また、このゲイやレズビアンの「友達」に対する鷹揚な褒め言葉のような記述は、サイードがスコットを評した、「ひとつの民族全体を『おしなべて』けなしておきながら、『私は別に貴殿を指してこのように申しておるのではない』という冷静な言葉で相手への侮辱を和らげようとする、軽薄な恩着せがましい態度」（サイード1993a:240）という一節を彷彿とさせる。

---

[6] 2016年6月1日付の博報堂DYグループの株式会社LGBT総合研究所による「LGBTに関する意識調査」では、「全国の20～59歳の個人100,000名（有効回答者数89,366名）を対象に実施したスクリーニング調査の結果、LGBTに該当する人は約5.9%（レズビアン：1.70%、ゲイ：1.94%、バイセクシャル：1.74%、トランスジェンダー：0.47%）」、「その他のセクシャルマイノリティに該当する人は約2.1%」との結果が出ている。（http://www.hakuhodo.co.jp/archives/newsrelease/27983 最終閲覧日2018年9月12日）

(5) そもそも日本には、同性愛の人たちに対して、「非国民だ！」という風潮はありません。一方で、キリスト教社会やイスラム教社会では、同性愛が禁止されてきたので、白い目で見られてきました。時には迫害され、命に関わるようなこともありました。それに比べて、日本の社会では歴史を紐解いても、そのような迫害の歴史はありませんでした。むしろ、寛容な社会だったことが窺えます。

ファノン曰く、「私は、ヨーロッパには人種差別的構造がある、と言おう。マノニ氏がこの問題に注目しなかったことは明らかである。なぜなら彼は『フランスは、世界中でもっとも人種差別的でない国である』[7] と書いているからだ。わがニグロの友よ、フランス人であることを喜びたまえ、たとえそれがいささか辛いことであるとしても。なぜならアメリカでは、君たちの仲間は、君たちよりずっとひどい目に会っているのだから…」(ファノン 1998:114)。植民地の支配者側である白人のマノニをファノンが批判したように、多数派である非当事者側が、迫害はなかった、寛容な社会だったと言い切ることにどれほどの信憑性があるのかを我々は問わねばならないのではないか。

(7) LGBT の当事者の方たちから聞いた話によれば、生きづらさという観点でいえば、社会的な差別云々よりも、自分たちの親が理解してくれないことのほうがつらいと言います。(…)
(8) これは制度を変えることで、どうにかなるものではありません。LGBT の両親が、彼ら彼女らの性的指向を受け入れてくれるかどうかこそが、生きづらさに関わっています。そこさえクリアできれば、LGBT の方々にとって、日本はかなり生きやすい社会ではないでしょうか。

20 代の ASD・LGBT 当事者の大学院生の D さんから、「なぜ親が差別するのか、理解してくれないのかということを考えると、それは親が社会の中に生きていて社会の構造を内面化しているから」である点、親が理解してくれないことと社会が差別することを別のものとして、社会差別の方を問題がないかのように語るのはおかしい、という点について指摘があった。社会問題を真剣に扱うべき政治家が性的少数者の問題を親子関係の中だけで解決させようとする封じ込めは、社会に受け皿がないと決めつけ、アスペルガー症候群の被告を「許される限り長期間刑務所に収容することで内省を深めさせる必要があり（…）社会秩序の維持にも資する」という医学的にも法的にも誤った理由で、

[7] 同書のこの部分には、出典が O. マノニ『植民地化の心理学』（スイユ社）である旨のファノンによる注釈がある。

検察の求刑 16 年を上回る 20 年間刑務所に閉じ込めようとした 2012 年の大阪地裁の差別判決に通じる思想が根底にあるように思われる。

本稿筆者は別稿で支援職のオリエンタリズム的思考について論じたが、オリエンタリズムは「オリエントを支配し再構成し威圧するための西洋の様式（スタイル）」であり、「ヨーロッパ文化が、一種の代理物であり隠された自己でさえあるオリエントからみずからを疎外することによって、みずからの力とアイデンティティーとを獲得した」（サイード 1993a:21,22）のであった。発達障害者支援においても、支援職が「一種の代理物であり隠された自己でさえある」発達障害者から「みずからを疎外することによって」、さらに、「性格の悪い」、「難しい」（山本 2016:74）発達障害者を含む障害者達の存在によって「みずからの力とアイデンティティーとを獲得」し、あるいはそれを公表することによって自らをより安全で優位な立場に置くという状況が存在する。LGBT に関連する言説における杉田のような多数派も、性的少数者に対して同様の態度で臨んではいまいか。

> (9) リベラルなメディアは「生きづらさ」を社会制度のせいにして、その解消をうたいますが、そもそも世の中は生きづらく、理不尽なものです。それを自分の力で乗り越える力をつけさせることが教育の目的のはず。「生きづらさ」を行政が解決してあげることが悪いとは言いません。しかし、行政が動くということは税金を使うということです。

教員 G が、ASD や LGBT 当事者の「生きづらさ」と「そもそも世の中は生きづらく」という生きづらさは全然違う話であり、それを区別しないで教育の話に結びつけている、と指摘した。教育に関しては、D さんも「生きづらく理不尽な世の中だって言ってるんだったら、乗り越えられない時もあると思う。そういう時にヘルプを求められる力をつけるのも教育の一部」であり、「その面を全く無視して自分の力だけと言っているのは、個人を追いつめて、より人を病ませる方向に主張しているように見える」と述べた。

> (11) (…)そもそも LGBT と一括りにすること自体がおかしいと思っています。T(トランスジェンダー）は「性同一性障害」という障害なので、これは分けて考えるべきです。自分の脳が認識している性と、自分の体が一致しないというのは、つらいでしょう。性転換手術にも保険が利くようにしたり、いかに医療行為として充実させていくのか、それは政治家としても考えていいことなのかもしれません。

LGB と T を分けるのはいいが、前述のようにトランスジェンダーと性同一性障害は

今や別物である。最新の動向を知らぬ上に、「つらいでしょう」、「考えていい」という表現の端々に、たまたま多数派に生まれついただけの幸運を自覚することもない定型発達者独特の視点が伺える。本稿筆者は別稿で市井の名もなき人の下記のような呟きを引用した。引用元は 2012 年に大阪維新の会が提出しようとした「家庭教育支援条例（案）」[8]に対する Twitter 上の批判をまとめたサイトである。

> たぶんこれを書いたひとたちは、自分と発達障害は縁がないと思っているだろう。そしてその幸運を、自分のたまさかの幸運ではないと思っているだろう。故あってのことだと思いあがっているだろう。恥を知るがいい [9]。

上記引用文の「これ」とは、「わが国の伝統的子育てによって発達障害は予防、防止できる」などの明らかに誤った文言である。これには抗議が殺到し、すぐに撤回された。

> (12) 一方、LGB は、性的嗜好の話です。(…) 私は中高一貫の女子校で、まわりに男性がいませんでした。女子校では、同級生や先輩といった女性が疑似恋愛の対象になります。ただ、それは一過性のもので、成長するにつれ、みんな男性と恋愛して、普通に結婚していきました。マスメディアが「多様性の時代だから、女性（男性）が女性（男性）を好きになっても当然」と報道することがいいことなのかどうか。普通に恋愛して結婚できる人まで、「これ（同性愛）でいいんだ」と、不幸な人を増やすことにつながりかねません。
> (13) (…) それこそ世の中やメディアが LGBT と騒ぐから、「男か女かわかりません」という高校生が出てくる。調査の対象は思春期の不安定な時期ですから、社会の枠組みへの抵抗もあるでしょう。

「性的指向」と「性的嗜好」の取り違えもそうだが、冒頭で述べた通り、同性愛と異性愛を自由に選択できるとするのは誤りである。「不幸な人」という決めつけも差別であると言え、なぜ「不幸」であるのかをつきつめれば決して親子間だけではなく社会的な問題であることが明らかになるはずである点からも論路破綻した表現であると言える。高校生が社会への抵抗のためにXジェンダーを名乗るというのも奇妙であり、Xジェンダーは発達障害と同じく後天的に「出てくる」ものでもない。

---

[8] http://osakanet.web.fc2.com/kateikyoiku.html　最終閲覧日 2018 年 9 月 24 日
[9]「大阪維新の会：“家庭教育支援条例案”が、驚愕以前にツッコミどころ満載…な件」（https://togetter.com/li/297254?page=2　最終閲覧日 2018 年 9 月 24 日）

（17）最近はLGBTに加えて、Qとか、I（インターセクシャル＝性の未分化の人や両性具有の人）とか、P（パンセクシャル＝全性愛者、性別の認識なしに人を愛する人）とか、もうわけが分かりません。なぜ男と女、二つの性だけではいけないのでしょう。

（18）オーストラリア（…）などでは、パスポートの性別欄を男性でも女性でもない「X」とすることができます。LGBT先進国のタイでは18種類の性別があると言いますし、SNSのフェイスブック・アメリカ版では58種類の性別が用意されています。もう冗談のようなことが本当に起きているのです。

（20）「LGBT」を取り上げる報道は、こうした傾向を助長させることにもなりかねません。朝日新聞が「LGBT」を報道する意味があるのでしょうか。むしろ、冷静に批判してしかるべきではないのかと思います。

本人にはどうしようもない性的指向や性自認をなぜ大手の新聞が「冷静に批判してしかるべきで」あるのか。批判されれば多数派の満足する「普通」の状態に変更できるのか。社会の無理解によって自死にまで追い込まれてきた者もいる少数派の窮状をさらに批判するとはどういうことなのか。発達障害と同じく「X」であれ名前がついて救われた少数者の存在を一国の政治家が「もうわけが分かりません」だの「冗談のようなことが本当に起きている」だのと切り捨てるような状況は異常である。2018年9月発売の「そんなにおかしいか『杉田水脈』論文」なる特集を組んだ『新潮45』10月号でも、小川榮太郎は「政治は『生きづらさ』という主観を救えない」という寄稿文において「Homo sapiensの性にはオスとメスしかない。（…）性には、生物学的にXXの雌かXYの雄しかない。雄しべ雌しべ以外に、レズしべとかゲイしべというのは無いのであって、Homo sapiensも同様だ。性別以前に回帰したければ来世はゾウリムシになればよく、雌雄同体に憧れるならカタツムリに生まれればいい」（小川2018:86）と述べている。これも批判が殺到して休刊の措置を取ったとはいえ、学術書も出版している歴史ある出版社の言説である。

加えて言えば、いっそう深刻な問題は、LGBTのクライエントと接する支援職にもLGBTにこのような嫌悪感を抱いて隠さぬ者が存在することだ。

同性愛のクライエントに対し、よりネガティヴなアセスメントや態度がセラピストによって示されることがある。このような現象をクリニカル・バイアスと呼ぶ。すなわち、クリニカル・バイアスとは、クライエントが所属する特定のマイノリティ集団に対してセラピストが抱くステレオタイプの影響で生じる、臨床的判断や態度

の歪みのことである。（松高 2016:42）

誰よりも少数派の特性や現状について勉強し理解すべきプロフェッショナルに偏見と無理解に満ちた者がいるのは、同性愛者に限らず、前述のように発達障害者に関しても同様である。今回の騒動においては国会議員や文芸評論家が誤った差別言説を公表しても訂正さえしないで済む社会状況に問題があることが露呈したが、それらや世間一般は勿論、周囲の無理解から抑鬱などの二次症状が出やすい少数派にとって最もたよりになるはずの心理職等までをも啓発せねばならない現状に、どのように対処すべきだろうか。

4 カルチュラル・スタディーズの希望

ホールは、しばしば「カルチュラル・スタディーズは、「汚い」世界の問題をアカデミズムという「清潔な」空間に持ち込むことである」という発言をしているが、カルチュラル・スタディーズにとって、学生とはまさに「汚い」世界の問題を大学に持ち込む重要な媒介者だったのである。（上野他 2000:87）

発達障害研究は新興の障害学もあるが主に医学、児童なら教育学の範疇に入れられ、自閉症は（異）文化であるという見方もあるものの、文化学の観点から論じられることはほとんどない。LGBT 関連の大学における研究はジェンダー研究またはジェンダー・女性学研究という名称の附属センター等の担当であることが多く、ASD も LGBT もともに、現存する成年当事者の苦境を扱った研究は、各当事者への聞き取りがエスノグラフィーやライフストーリー・インタビューとして社会学系あるいは人間科学系等でわずかに行われているにすぎない。

たとえば、人種差別や奴隷制の持っている問題を考えるためには、西欧の哲学者であるカントやヘーゲルを読むよりも、黒人知識人であるフレデリック・ダグラスやマーティン・ルーサー・キングを読む方がいいのではないか（…）。

こういうと、「文学部には黒人文学という領域があるので、そこで勉強すればいい」だとか「大学の中にもアフリカ系アメリカ研究という立派な学問があるじゃないか」などという反論があるかもしれない。（…）

黒人研究やフェミニズム、あるいはクィア・スタディーズといった学部を新たに創設して、「その手」の研究者をそこに集めようというのは、単なるアカデミズムのゲットー化にすぎない。自分たちが理解できない者を集めて囲い込み勝手に発言

する場所を与えることによって、伝統的な学問をそうした不純物から守ろうとしているだけである。（前掲 :88-89）

杉田は件の寄稿文を次のように締めくくる。「『常識』や『普通であること』を見失っていく社会は『秩序』がなくなり、いずれ崩壊していくことにもなりかねません。私は日本をそうした社会にしたくありません」。

教員 E は、「多様性を認めないのは障害者基本法の否定であり、優生思想に通じる」と指摘し、教員 G は「これは全く反対に書くこともできる、多様性や複雑性を見失っていく社会は秩序がなくなり…と」と述べた。「ナチスのホロコーストはユダヤ人だけではなく同性愛者や知的障害者などもガス室に送り込んだ。それが秩序ある社会だったというのか」。

私は日本をそうした多様性を排除する社会にしたくない。非当事者の理解と協力を得るためには、教育・研究に携わる大学こそが「アカデミズムのゲットー化」を排し、LGBT や ASD 研究を特定の学部やセンターに押しつけるのではなく、心理職など専門家養成の課程は無論のこと、それ以外の様々な分野でも積極的に扱うべきである。アカデミズムに関わる者こそが広い視野を持ち、率先して社会への啓発を意識した学際的な門戸開放に尽力すべきではないのか。マイノリティーをいつまでも「不純物」扱いしているから、影響力ある人間までもが無知なままなのである。日本の課題であると考える。

〈参考文献〉

上野俊哉、毛利嘉孝『カルチュラル・スタディーズ入門』筑摩書房、2000。

小川榮太郎「政治は『生きづらさ』という主観を救えない」『新潮 45』2018 年 10 月号、新潮社、pp.84-89。

グニラ・ガーランド（2004）熊谷高幸監訳　石井バークマン麻子訳『自閉症者が語る人間関係と性』東京書籍、2007。

エドワード・W・サイード（1976）今沢紀子訳　板垣雄三、杉田英明監修『オリエンタリズム　上』(a)、『オリエンタリズム　下』(b) 平凡社、1993。

佐々木掌子『トランスジェンダーの心理学―多様な性同一性の発達メカニズムと形成―』晃洋書房、2017。

杉田水脈「『LGBT』支援の度が過ぎる」『新潮 45』2018 年 8 月号、新潮社、pp.57-60。

杉山登志郎、辻井正次編著『高機能広汎性発達障害―アスペルガー症候群と高機能自閉症―』ブレーン出版、1999。

杉山登志郎『発達障害の子どもたち』講談社、2007。

高石浩一「学生相談におけるセクシュアル･マイノリティ」『精神療法』第 42 巻第 1 号、金剛出版、2016、pp.30-34。

針間克己「セクシュアリティと LGBT」『こころの科学』189 号、日本評論社、2016、pp.8-13。

フランツ・ファノン（1952）海老坂武、加藤晴久訳『黒い皮膚・白い仮面』みすず書房、1998。

松髙由佳「同性愛とクリニカル・バイアス」『精神療法』第 42 巻第 1 号、金剛出版、2016、pp.42-47。

山内俊雄『性転換手術は許されるのか　性同一性障害と性のあり方』明石書店、1999。

山本智子『発達障害がある人のナラティヴを聴く―「あなた」の物語から学ぶ私たちのあり方―』ミネルヴァ書房、2016。

Label X 編著『X ジェンダーって何？―日本における多様な性のあり方』緑風出版、2016。

Reed-Danahay, Deborah E.（1997）. Introduction. In D.E.Reed-Danahay,（Ed.）*Auto / Ethnography : Rewriting the Self and the Social.* BERG, pp.1-17.